

1970年代以降の家政学におけるヒューマン・
エコロジーと人間エコシステム・モデル研究：
Sue L.T. McGregor の論考を手がかりに

倉 元 綾 子

Human Ecology and Human Ecosystem Models
in Home Economics since the 1970s:
From the discussion by Sue L.T. McGregor

Ayako Kuramoto

Abstract

The research and discourse on human ecology and the human ecosystem models in home economics since 1970s were reviewed, mainly with reference to Sue L. T. McGregor's discussion. The research findings are as follows;

(1) Ellen S. Richards used the term and concept of human ecology from the late 1800s, during the founding period of home economics.

(2) The ideas of human ecology and human ecosystems have been repeatedly identified in each of the landmark conferences and documents of American home economics.

(3) In 1979, Bubolz, M. M., Eicher, J. B., & Sontag, M. S. proposed the human ecosystem model in their paper The human ecosystem: A model. In the model, a human living unit (HEU, Human Environed Unit) is placed in the central part, which is divided into Natural Environment, Human Constructed Environment, and Human Human Behavioral Environment. The model particularly emphasizes

the interaction of each element.

(4) Bubolz, Paolucci, Vaines, Darling, and other researchers in the philosophy of American home economics have led and evolved the discussion of human ecology and the human ecosystem models.

Keywords キーワード : home economics 家政学, human ecology ヒューマン・エコロジー, human ecosystem model 人間エコシステム・モデル, Bubolz ブボルツ

1. はじめに

2020年からのCOVID-19は日本社会における政治経済、生活の状況の弱点を明らかにし、特に女性と子ども、高齢者、非正規労働者の置かれている過酷な状況を露見させた。

一方、国連SDGsと国際家政学会(International Federation of Home Economics: IFHE)のSDGsポジション・ステートメント(2016)を受けて、日本家政学会は、2023年5月、家政学原論部会原案による『日本家政学会のSDGsポジション・ステートメント』を公表した(2023)。これは、日本家政学のこれまでの持続可能な社会をめざす取り組みを示すとともに、家政学の今後のアクション・プランを明らかにするものである。

本文書作成にあたって、家政学原論部会は2019年3月から2022年12月までの間、ゴール3&5, 11, 12のグループごとに議論を取りまとめた。部会全体では、家政学会年次大会の部会企画、夏期セミナー等を通じて、学会員、生活経営学部会、家族関係学部会、家政教育部会などとの意見交流を行い、衆知を集めた。

家政学原論部会からの提案文書を日本家政学会の公表文書にするプロセスで、重要な焦点となったのが、「第三部 家政学の視点と家政学に特に関連の深い目標 I. 家政学における人間と環境の捉え方とSDGs」(家政学原論部会提案文書)の中の図であった(図1)(日本家政学会家政学原論部会, 2022)。これに対して日本家政学会の公表文書では、ブボルツ(Bubolz, M. M.)ら

が1979年にアメリカ家政学会誌で示した「人間エコシステム図の例：身近なHBE（人間行動的環境）、HCE（人間創成的環境）およびNE（自然環境）」（筆者仮訳）の図が用いられた（Bubolz et al, 1979）。

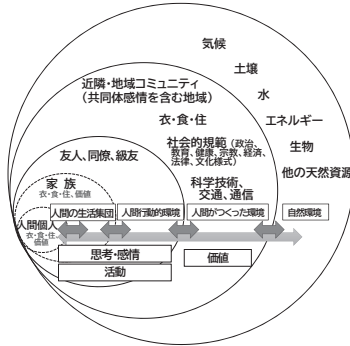
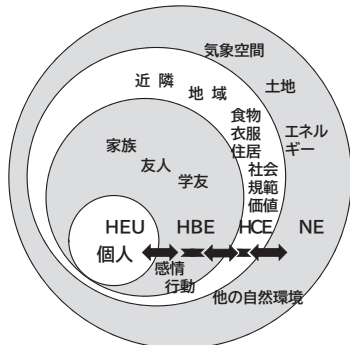


図1. 家政学における人間と環境の捉え方
(2022年12月12日, (一社)日本家政学会家政学原論部会案)
出典：ブボルツ他, 1979年に発表した図を改変



HEU: Human Environment Unit
人間を取り囲む単位
HBE: Human Behavior Environment
人間が行動する環境
HCE: Human Created Environment
人間がつくり出した環境
NE: Nature Environment
自然環境

図2. 家政学における人間と環境の捉え方
「人間エコシステム図の例：身近なHBE（人間行動的環境）、HCE（人間創成的環境）およびNE（自然環境）」(2023年6月23日, (一社)日本家政学会)
出典：(社)日本家政学会 家政学原論部会 翻訳・監修『家政学 未来への挑戦—全米スコットズデイル会議におけるホーム・エコノミストの選択—』建帛社, 2002, 206 (本図は, Bubolz 他が1979年に発表した論文に基づく：Bubolz, M. M., Eicher, J. B., & Sontag, M. S. (1979). The human ecosystem: A model. *Journal of Home Economics*, Vol. 71, No. 1, 28-31.

しかし、今日なお1979年の図を用いることによって、家政学原論研究と家政学研究においては今日性が十分でない、一般の人々や他分野の研究者から受け止められかねない。また、家政学原論研究として、1979年から今日までの生活と社会の変化と理論研究を反映させた説得力のある人間エコシステム・モデルを検討することが必要である。

そこで、本研究では、1970年代以降のヒューマン・エコロジーや人間エコシステム・モデルに関する研究を検討し、課題解決の一助としたい。

2. 研究目的・研究方法

主に1970年代以降の日本と世界のヒューマン・エコロジーや人間エコシステム・モデルに関する研究を調査し、日本の家政学原論研究の基礎的資料とする。

主に1970年代以降の日本と世界のヒューマン・エコロジーや人間エコシステム・モデルに関する研究を調査し、内容を検討する。

3. 結果および考察

(1) マクレガー (Sue L.T. McGregor) の論稿

後述するように、データベースによる文献調査を試みたところ、数が多く、内容も多様で、文献調査は容易ではないことが分かった。そこで、すでにいくつかのヒューマン・エコロジーに関する論考を公表しているマクレガー (Sue L.T. McGregor) の文献を探索したところ、関連するレビューを見つけることができた。

そこで、本稿ではMcGregorの論考、*The Philosophy of Integration: Historical Heritage, Compromised Ideal*(2023)で取りあげている文献を中心に、ヒューマン・エコロジーと人間エコシステム・モデルに関する議論の内容を調査した。

マクレガーは、マウント・セント・ヴィンセント大学名誉教授(カナダ)で、家政学、消費者研究、消費者教育などの研究に従事している。IFHE *International Journal of Home Economics* 編集委員を務め、KON マージョリー・M・ブラウン特別教授賞を受賞している。ペンダーガスト、トゥルッキとの共編著 *The Next 100 years : Creating Home Economics Futures* (2012) のほか、多

数の編著書，論文がある (McGregor Consulting Group, 2024)。

(2) 家政学分野のヒューマン・エコロジーおよび人間エコシステム・モデルに関する研究

マクレガーの文献から，家政学分野のヒューマン・エコロジーおよび人間エコシステム・モデルに関する主要な研究を抽出した。その結果を表1に示す。

表1 家政学分野のヒューマン・エコロジーおよび人間エコシステム・モデルに関する研究 (文献リスト, 文献執筆年順)

Lake Placid Conference on Home Economics. (1902). <i>Proceedings of the Fourth Annual Conference</i> , Volume 4.
Schlater, J. D. (1970). <i>National goals and guidelines for research in home economics</i> .
Paolucci, B. (1973). Home economics: Its nature and mission.
Bubolz, M. M., Eicher, J. B., & Sontag, M. S. (1979). The human ecosystem: A model.
Bubolz, M. M., & Sontag, S. (1988). Integration in home economics and human ecology.
Touliatos, J., & Compton, N. H. (1988). <i>Research methods in human ecology/home economics</i> .
American Association of Family & Consumer Sciences. (1993). <i>Positioning the profession for the 21st century: A conceptual framework</i> .
Vaines, E. (1994). Ecology as a unifying theme for home economics/human ecology.
Darling, C. A. (1995). An evolving historical paradigm: From 'home economics' to 'family and consumer sciences.'
Bubolz, M. (1996). A century of progress: A future of caring.
Anderson, C. L., & Nickols, S. Y. (2001). The essence of our being.
Merchant, C. (2007). <i>American Environmental History</i> .
Heinilä, H. (2008). The art of everyday life within the domestic sphere: Phenomenological inquiry of domestic skills as a way of being-in-the-world.
Nickols, S. Y., Ralston, P. A., Anderson, C., Browne, L., Schroeder, G., Thomas, S., & Wild, P. (2009). The family and consumer sciences body of knowledge and the cultural kaleidoscope.
Anderson, S. (Ed.). (2014). <i>Collins English dictionary (12th ed.)</i> .
Dyball, R., & Carlsson, L. (2017). Ellen Swallow Richards: Mother of human ecology?
McGregor, S. L. T. (2023) The Philosophy of Integration: Historical Heritage, Compromised Ideal.

(筆者作成)

これらのなかから，ヒューマン・エコロジーと人間エコシステム・モデルに関連する内容をマクレガーの論考などを参照して検討した。

- ・1800年代後半から1900年代前半：リチャーズ (Ellen Swallow Richards) は，レイク・プラシッド会議，新しい学問分野をヒューマン・エコロジーと呼びたいと考えていた (Lake Placid Conference on Home Economics, 1902)。

- ・1907：リチャーズ (Ellen Swallow Richards) が著書 *Sanitation in Daily Life* (日常生活における衛生管理) (1907) でヒューマン・エコロジーという言葉を用いて初めて使う (Dyball, R., & Carlsson, L., 2017; Merchant, C., 2007)
- ・1960年代後半から1970年代前半：エコシステムの視点が登場する (McGregor, S. L. T., 2023)。
- ・1970年代以降：家政学と専門職は、一貫してヒューマン・エコロジーの理論を援用してきた (Bubolz, M. M., & Sontag, S., 1988; Touliatos, J., & Compton, N. H., 1988)。
- ・1970：シュレーター (Schlater, J. D.) が *National Goals and Guidelines for Research in Home Economics* (家政学研究の全米的目標とガイドライン) を出版した。「家政学は、エコロジカル・モデルを基礎にして、家族と、人間と身近な環境の相互作用にコミットする」ことを改めて表明した (Schlater, J. D., 1970; Vincenti, V. B., 1997)。
- ・1973：AHEA は分野の方向性について合意を得るために、第11回レイク・ブラシッド会議を開催した (Vincenti, V. B., 1997)。「ホーム・エコノミクスという特別な統合的アプローチを通して、家族は、問題を解決する方法を学ぶべきである」とした (American Home Economics Association, 1973)。ポルーチ (Paolucci, B.) は論文 *Home economics: Its nature and mission.* のなかで、家政学は、研究分野として、「エコロジカルであり、統合的である」と述べた (1973)。
- ・1979：ブボルツ、アイシャー、& ソンタグ (Bubolz, M. M., Eicher, J. B., & Sontag, M. S.) は、論文 *The human ecosystem: A model.* のなかで、人間エコシステム・モデルを提示した。中心部分に人間の生活集団 (HEU, Human Environed Unit, 環境に囲まれた人間のユニット) を配置し、これを取り巻く環境を、自然環境 (Natural Environment), 人間創成的環境 (Human Constructed Environment), 人間行動的環境 (Human Behavioral Environment) とした。これらの要素の相互作用の重要性を強調して示した。
- ・1988：ブボルツ&ソンタグ (Bubolz, M. M., & Sontag, S.) は、論文 *Integration*

in home economics and human ecology. で、統合とは「相互依存的な部分からなる複雑なシステムとして、現象を全体的にとらえ、協調的な相互作用と機能的な関係によって結びつけること」とした。前提、概念、コンピテンシー、価値観、哲学的視点、家政学分野の歴史的伝統の見直しの分析を行っている。統合の複数のレベルの提案、専門的対話を促進するための3つのモデル（ヒューマン・エコロジーのメタシステムのクリティカル・パス・フローチャート、ヒューマン・エコロジーのシステム・フロー・モデル、ヒューマン・エコロジーにおける統合のための入れ子式カップ・モデル）を提示している。また、5つの中核概念、6つの中核能力、14以上の中核的価値観を提示している。

- ・1988：ツェリアトス&コンプトン（Touliatos, J., & Compton, N. H.）は、論文 Research methods in human ecology/home economics のなかで、家政学の専門分野を統合する方法として、ヒューマン・エコロジー研究の統合的アプローチを推奨した。
- ・1993：スコッツデール会議が開かれた。アメリカ家政学はその名称を家政学／ヒューマン・エコロジーから家族・消費者科学（Family and Consumer Sciences）に変更した。「家族・消費者科学は、個人、家族、コミュニティ、そしてそれらが機能する環境との関係に統合的アプローチを用いる」ことを承認した（American Association of Family & Consumer Sciences, 1993；Simerly, C. B., Ralston, P. A., Harriman, L., & Taylor, B., 2000）。専門職の実践の重要な部分は、中核概念としての統合、知識の発見、統合、応用に焦点をあてる、主題や専門分野を超えた知識の統合である（American Association of Family & Consumer Sciences）。
- ・1994：ヴェインズ（Vaines, E.）が論文 Ecology as a unifying theme for home economics/human ecology. 「家政学／ヒューマン・エコロジーを統合するテーマとしてのエコロジー」を提示した。「統合によって、家政学／ヒューマン・エコロジーの知的、実践的、倫理的な活動の間の協力と想像力は、この分野の新しい理解をもたらすことができる」とした。
- ・1995：ダーリン（Darling, C. A.）が論文 An evolving historical paradigm:

From 'home economics' to 'family and consumer sciences.' で、家族・消費者科学（家政学）の統合モデルを提示した。「専門職の統合的な概念化には長い歴史があり、進化を続け、現在ではエコロジカルな枠組みに基づいている」とし、実践者は「全体性と統合に注意を払わなければならない」と述べた。さらに、「家政学／家族・消費者科学の統合的視点の強みは、いくつかの構成要素を（新しい全体へと）組み合わせることによる相乗効果から生まれる」とした。また、家族・消費者科学（家政学）を「個人、家族、コミュニティと、それらが機能する多面的な環境との相互関係に焦点を当てることによって、生活の質（QOL）を高めることに関係する統合的な専門職」と定義している。

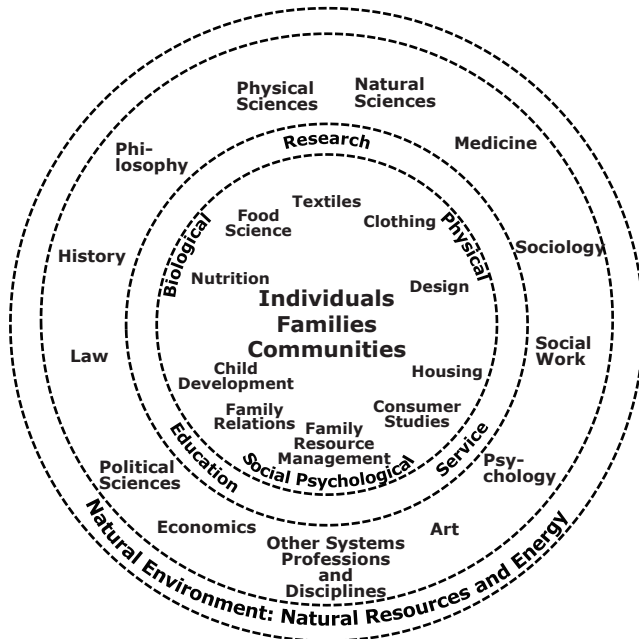


図3 家政学・家族消費者科学の統合モデル

出典：Darling, C. A. (1995). An evolving historical paradigm: From 'home economics' to 'family and consumer sciences.' *International Journal of Consumer Studies*, 19(4), 367-379. <https://doi.org/10.1111/j.1470-6431.1995.tb00558.x> (2024年1月25日閲覧).

- ・1996：ブボルツ（Bubolz, M.）は論文 A century of progress: A future of caring. のなかで、「ヒューマン・エコロジーにおける統合に関連するいくつかの課題」を示した（1996, March 21-23）。知識の統合，プログラム，専門職全体の専門分化，専門職の構造とその機能，人間相互（between），人々の間（among），人々の内部（within）を含めた。専門職がその使命を果たすサービスを提供するためには，価値観に基づく基盤と，教育，研究，知識を統合しなければならないと結論づけた。
- ・2008：ハイニラ（Heinilä, H.）が論文 The art of everyday life within the domestic sphere: Phenomenological inquiry of domestic skills as a way of being-in-the-world. のなかで，日常的な家庭生活を回転する独楽に例えた。独楽の先端の細い部分は他者への気遣いや配慮であり，弾み車は日常生活を向上させるために使われる家事スキルを表している。家政学者は，独楽の王冠に触れて，全体を形成するように促し，促進する。そして，日常生活を「形と色が融合した一つの全体」ととらえる。ハイニラは，家政学者は「現象から（あるいは現象について）ではなく，現象のなかで」問いを立てるべきだと説明した。
- ・2011：アメリカ家族・消費者科学会（AAFCS）は，ニコルズ，ラルストン，アンダーソン，ブラウン，シュローダー，トマス，ワイルド（Nickols, S. Y., Ralston, P. A., Anderson, C., Browne, L., Schroeder, G., Thomas, S., & Wild, P.）による論文 The family and consumer sciences body of knowledge and the cultural kaleidoscope. で、「現在の知識体系（BOK, Body of Knowledge）を提示した。中核概念や横断的テーマだけでなく，ヒューマン・エコロジーとライフコース開発という2つの統合的要素が，専門職のダイナミックでホリスティック，統合的な性質を強化し，知識体系を支えていることを示した（Anderson, C. L., & Nickols, S. Y., 2001）；Nickols, S. Y. et al., 2009）。BOKは専門的な領域を構成する反復的な要素の完全な集合を表し，統合はFCSの実践にとって極めて重要である（Hernandez, S. (Ed.), 2012）。

4. 要約および今後の課題

以上のように、マクレガーの論考などを参照して、主に1979年以降の家政学におけるヒューマン・エコロジーや人間エコシステム・モデルに関連する研究と言説を検討した結果、以下の点が明らかになった。

- (1) エレン・リチャーズは、1800年代後半、家政学創設期から、ヒューマン・エコロジーという用語と概念を用いた。
- (2) アメリカ家政学の歴史的会議や文書公表では、ヒューマン・エコロジーや人間エコシステムの考え方が繰り返し確認されてきた。
- (3) 1979年、ブボルト、アイシャー、&ソントグは、1979年、論文 *The human ecosystem: A model.* のなかで、人間エコシステム・モデルを提示した。中心部分に人間の生活集団（HEU, Human Environed Unit, 環境に囲まれた人間のユニット）を配置し、これを取り巻く環境を、自然環境（Natural Environment）、人間創成的環境（Human Constructed Environment）、人間行動的環境（Human Behavioral Environment）とし、人間集団とそれらの環境との相互作用の重要性を強調して示した。
- (4) ブボルト、ポルーチ、ヴェインズ、ダーリンら、アメリカ家政学の哲学における論客たちが、ヒューマン・エコロジーや人間エコシステムに関する議論をリードし、進化させてきた。

以上のように、マクレガーの論考などをもとに、ヒューマン・エコロジーや人間エコシステム・モデルの受容と発展を検討した。その結果、ヒューマン・エコロジーの考え方が幅広く受容されてきたことを確認することができた。しかしながら、人間エコシステム・モデルの受容と発展についてはさらなる検討が必要であることが示唆された。

今後、この点についてさらに検討を進めたい。また、今日的な人間エコシステム・モデルを検討し、家政学原論・家政学研究と教育に資するものとしたい。

なお、当初、データベースを用いた分析を試みた。human ecology, human

ecosystem model, Bubolz, home economics (ヒューマン・エコロジー, 人間エコシステム・モデル, ブボルツ, 家政学) を用いて, 引用部分を含まない検索を行った結果, Google Scholar の英語と日本語による検索では, 約 2,160 件がヒットした。food, nutrition, clothing, textile, housing (食物, 栄養, 被服, テキスタイル, 住居) を除いた検索では 508 件であった。一方, Cinii Research による検索では, 英語でも日本語でもヒットしなかった。これらの解明も課題である。

引用文献

- American Home Economics Association. (1973). *Lake Placid conference proceedings* (Vol. 11). https://digital.library.cornell.edu/catalog/hearth6060826_5317_001. (2024年4月20日閲覧).
- American Association of Family & Consumer Sciences. (1993). *Positioning the profession for the 21st century: A conceptual framework*.
- Anderson, C. L., & Nickols, S. Y. (2001). The essence of our being. *Journal of Family & Consumer Sciences*, 93 (5), 15-18.
- Bubolz, M. M., Eicher, J. B., & Sontag, M. S. (1979). The human ecosystem: A model. *Journal of Home Economics*, Vol. 71, No. 1, 28-31.
- Bubolz, M. M., & Sontag, S. (1988). Integration in home economics and human ecology. *International Journal of Consumer Studies*, 12 (1), 1-14. <https://doi.org/10.1111/j.1470-6431.1988.tb00462.x> (2024年1月25日閲覧).
- Bubolz, M. (1996, March 21-23). A century of progress: A future of caring. In L. Nelson & M. Andrews (Eds.), *In Proceedings of the third Beatrice Paolucci symposium* (pp. 48-58). Michigan State University College of Human Ecology.
- Darling, C. A. (1995). An evolving historical paradigm: From 'home economics' to 'family and consumer sciences.' *International Journal of Consumer Studies*, 19 (4), 367-379. <https://doi.org/10.1111/j.1470-6431.1995.tb00558.x> (2024年1月25日閲覧).
- Dyball, R., & Carlsson, L. (2017). Ellen Swallow Richards: Mother of human ecology? *Human Ecology Review*, 23 (2), 17-28.
- Heinilä, H. (2008). The art of everyday life within the domestic sphere: Phenomenological inquiry of domestic skills as a way of being-in-the-world. In T. Tuomi-Gröhn (Ed.), *Reinventing art of everyday making* (pp. 53-70). Peter Lang.
- Hernandez, S. (Ed.). (2012). *Official (ISC) 2 guide to the CISSP CBK (3rd ed.)*. Auerbach. International Federation for Home Economics.
- (一社) 日本家政学会. (2023). 日本家政学会のSDGs ポジション・ステートメント. https://www.jshe.jp/oshirase/20230623_SDGs.pdf. (2024年4月20日閲覧).

- (一社)日本家政学会家政学原論部会. (2023). 日本の家政学のSDGsポジション・ステートメント. *家政学原論研究*, 57, 49-71.
- International Federation for Home Economics (2016, 2019). *SDGs from a home economics perspective*.
- Lake Placid Conference on Home Economics. (1902). *Proceedings of the Fourth Annual Conference*, Volume 4. Ithaca, NY: Cornell University. hearth.library.cornell.edu/cgi/t/text/text-idx?c=hearth;idno=6060826_5315_001. (2024年4月20日閲覧).
- McGregor, S. L. T. (2023). The Philosophy of Integration: Historical Heritage, Compromised Ideal. *International Journal of Home Economics*, 16(1), 36-59.
- McGregor Consulting Group. (2024). About Dr. Sue L. T. McGregor. <https://consultmcmgregor.com/about/dr-mcmgregor-s-bio-and-cv> (2024年4月20日閲覧).
- Merchant, C. (2007). *American Environmental History*. Columbia University Press.
- Nickols, S. Y., Ralston, P. A., Anderson, C., Browne, L., Schroeder, G., Thomas, S., & Wild, P. (2009). The family and consumer sciences body of knowledge and the cultural kaleidoscope. *Family and Consumer Sciences Research Journal*, 37(3), 266-283. <https://doi.org/10.1177/1077727X08329561> (2024年1月25日閲覧).
- Paolucci, B. (1973). Home economics: Its nature and mission. In *Lake Placid conference proceedings* (Vol. 11, pp. 31-32). American Home Economics Association. https://digital.library.cornell.edu/catalog/hearth6060826_5317_001 (2024年1月25日閲覧).
- Schlater, J. D. (1970). *National goals and guidelines for research in home economics*. Michigan State University Press.
- Simerly, C. B., Ralston, P. A., Harriman, L., & Taylor, B. (2000). The Scottsdale initiative: Positioning the profession for the 21st century. *Journal of Family and Consumer Sciences*, 92(1), 75-80.
- Touliatos, J., & Compton, N. H. (1988). *Research methods in human ecology/home economics*. Iowa State University Press.
- Vaines, E. (1994). Ecology as a unifying theme for home economics/human ecology. *Canadian Home Economics Journal*, 44(2), 59-62.
- Vincenti, V. B. (1997). Chronology of Events and Movements Which Have Defined and Shaped Home Economics. In S. Stage & V. B. Vincenti (Eds.), *Rethinking home economics: Women and the History of a Profession*. 321-330. Cornell University Press.